

## 知的活動と生涯現役に関する研究ノート (2)

Study notes on the relation of aging and intellectual activities (2)

窪田 八洲洋\* 長田 智剛\*\*  
Yasuhiro Kubota Toshitaka Nagata

### 抄録

本研究の目的は、少子高齢社会における高齢者が、生涯に亘って社会の一員としていきいき生きる「健康現役社会」の実現に関する仕組みを提言することにある。

第1報では、医療・介護を中心とする高齢者の現状ならびに知的活動が最後まで衰えず「生涯現役」であった古今東西の諸先輩の遍歴等について分析を行った。

本報では、「健康現役社会」を実現する仕組みに関する具体的提言を踏るため、現在、高等教育機関で学ぶシニア学生ならびに公開講座等で学ぶ意欲的な高齢者の実態を分析し、「高齢者の知恵と経験を活かす仕組み」について提言する。具体的には、現状の「予防介護」をさらに発展・強化する施策の一環として、意欲ある高齢者が「若者と同じ学問の場」で体系的・継続的に学び、再構築された知恵と経験を「小中高大の講師」等として社会に還元する。そのふりかえりとして「再び学び還元する」というサイクルが、生涯に亘って高齢者に定着するための仕組みとして、社会保障費からの学費助成を行う。これによって多くの高齢者が安心して「高等教育機関」での自己研鑽(精神的な高揚)と社会への還元による「いきがい(至福感)」を得ることによって「健康現役社会」が実現し、結果的には医療費・介護費の削減にも寄与する仕組みについて提言する。

### Abstract

The purpose of this study notes was to research the relationship between aging and intellectual-activities. First of all, I investigated the relationship between aging and intellectual-activities of famous persons from ancient Greece to the present around world. The results showed that continual intellectual works on aging was activated in life and did not need support of others

---

\* 人間科学部

\*\* 経営学部シニア学生

until at the moment of death.

Therefore, part of the national budget for support of aging persons has to be used for the intellectual works on aging. I will develop a support system for the intellectual works for aging persons that will have be used by the seniors called “TERAKOYA” .

The government should offer senior students a scholarship we called “10-10plan (10thousand’s senior students supported by 10billion yen on every year).”

## 1. はじめに（研究の背景：再掲）

本研究を始めようとした直接の動機は、いわゆる高齢者の立場から、現在の少子高齢化社会における「介護・医療」行政のあり方について素朴な疑問を抱いたからである。

現在の施策は、「高齢者イコール介護を要するもの、高額医療費の受給者」というマイナス思考の視点に立って、単に“生活年齢”のみで「労働人口、前期高齢者、後期高齢者」と色分けを行い、本人の意思・実態とは全く無関係に強制的に介護保険に加入させ、それに伴う介護保険事業者を創出し、その結果、「施設における高齢者虐待」や「コムスン介護報酬不正請求事件」など、介護保険料にまつわる官・業界の不正の温床を醸成してきた側面があることは否めない。

さらに、平成20年4月からは、今まで国民健康保険、被用者保険等の被保険者、被扶養者であった後期高齢者をそれぞれの保険から脱退させ、基本的には受益者負担の原則に則り「後期高齢者医療制度」に強制的に加入させて新たな独立財源を創設し、後期高齢者の互助で医療費を負担させる制度が発足した。この新しい制度を維持・管理するために「後期高齢者医療広域連合ならびに審査会」等の新たな組織・関係者と財政支出を創出した。しかし、この制度が将来、介護保険の二の舞を生み出す温床を醸成するのではないかと危惧せざるを得ない。

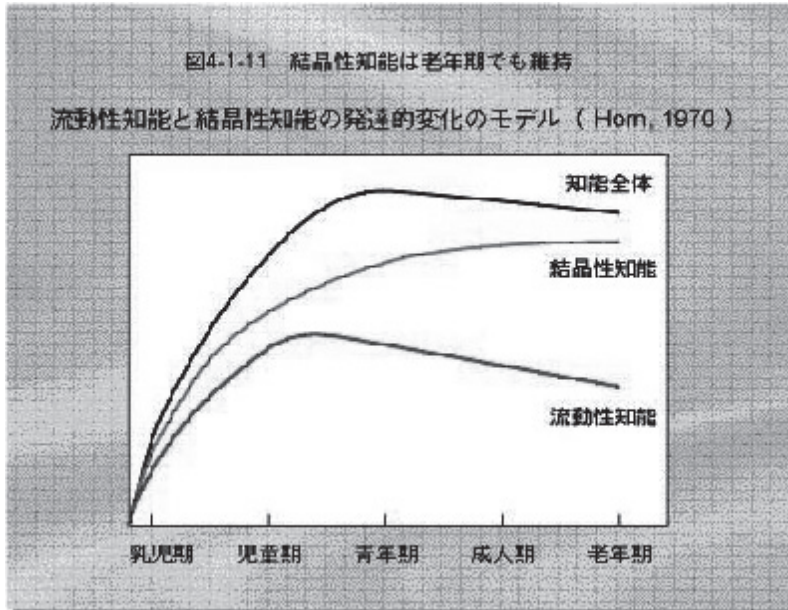
確かに、現在、日本人の平均寿命は、平成19年簡易生命表によれば、男78.56年、女85.52年と世界一の長寿国ではあるが、この中には、施設や自宅で、あるいは病院で寝たきりで何年も生き続けるという、本人は勿論のこと、家族や社会にとってもかなりの負担になっている人々がいることは否めない。

一方、私達の周りには、多くの元気な高齢者が見受けられる。特に、後期高齢者といわれる、現在75歳以上は、青少年期の戦争による「死の恐怖」と毎日対峙し、戦後、この恐怖から脱却しても、待ち受けていたものは食うや食わずの飢餓状態であった。これにも耐え忍びつつ、高度成長の牽引車として、只ひたすらに生き続けてきたことにより「生きるとは何か、幸せとはなにか」それは、物欲的な豊かさではなく「自力で、一日一日を充実して生きていく達成感・満足感が、いきいきと生きる原動力である」ことを、「生活の知恵」として体得してきた世代である。従って、これらの世代は、敢えて極論すれば、なまじっか過剰な介護・医療をせずに突き放したほうが、生得的に獲得した往年の活力を呼び覚まし、人間としての尊厳死を迎えることが出来るのではないかと推量する。

ちなみに、「語彙や常識などの知識は成人期を通じて増え続ける。このような経験と知識の豊かさや正確さと結びついた能力を結晶性知能と呼び、学校教育や社会経験によって学習すると考えられている。」<sup>1)</sup>

平成9年版厚生白書で、結晶性知能は老年期でも維持することが明記されている。(図1)<sup>2)</sup> さらに、脳専門の研究者らが、いままで不可能と考えられてきた流動性知能を向上させる方法を初めて発見したとの発表もある。<sup>3)</sup>

図1. 流動性知能と結晶性知能の発達的变化のモデル (平成9年度厚生白書)



これらを裏付けるものとして、昨今、マスコミ等で紹介されている「百歳現役」の方々をはじめ、年を重ねてもなお自律的に新たな挑戦を目指す多くの高齢者の生きざまを仄聞することが出来る。例えば、NHKの「ラジオ深夜便：心の時代」で紹介されたエピソード『かつてピアニストであった女性が80歳で軽い認知症にかかり、かつ車椅子の生活になったとき、当初、娘さんが入浴を含め身の回りの世話をしていた。しかし、あるとき、かつての母の養育態度を思い出し、できるだけ自力でするように突き放していったところ、90歳になってピアノサイタルを開くまでに回復した』ことなどは、周囲の人々に希望と勇気を与えるものである。また、身近な例として、高校教員を定年退職し自宅療養後、本学に勤務するようになった某職員は、末期がんで後1ヶ月の命と宣告され、退院を余儀なくされたが、「自ら生きる気力」を振り絞って東奔西走し、あらゆる努力を重ねたところ、すでに6年を経過した現在もなお知的活動を続けている。さらに古くは、第I報で述べたように、89才で没するまで創作活動を続けた葛飾北斎、70歳から85歳没まで著述に専念した貝原益軒、106歳で没する直前まで研究所に通い学术论文を毎年1本以上発表し続けた伊藤博士、98歳にして今なお現役として活躍中の日野原医師、97歳現役で活躍中の新藤映画監督など、いわゆる百歳現役はまず健康であり、最後まで知的活動が衰えなかったのである。

これら事例のような、「知的活動」が、いきいき生きる「介護フリー」のいわゆる「生涯健康現役」の主要因になり得るや否やについては、今後の研究に待たねばならない。しかし、現在の「介護・医療制度」は、「高齢者イコール介護ありき」というマイナス思考によって、高齢者の自律性を阻害し、介護者や病人を創出しているという側面は否めない。

本来は、現在の介護・医療費の肥大化を図る前に、「高齢者の豊富な知識や経験・技能等は国の宝」というプラス思考で、高齢者が「いきいき生きる」社会環境を整備するのに税金を投入することが先決であろう。すなわち、高齢者が健康で、豊富な知識や経験・技能等を活かし、生涯を通じて様々な分野でいきいきと活躍できる「生涯健康現役社会」を実現することによって、高齢者は人間性を回復し、同時に介護費や医療費の削減はもとより、家族や地域社会のお荷物的存在から地域社会の一員として応分の役割を担ってもらうことのほうが極めて有益であろう。ちなみに、関西国際大学では、平成18年4月からシニア特別選考学生を受け入れているが、彼らは、再び学ぶことによって「心身ともに若返り、若者と一緒に海外語学研修に行く気力と体力が出てきた」あるいは「若者と同じ学びの場で、学問としての知的刺激を受けることによって『いきいきしてきれいになった』と身内からいわれている」など「再び学びいきいき生きている」体験等が紹介された。<sup>4)</sup>

## 2. 研究の目的

- (1) 本研究の第1の目的は、知的活動と生涯健康現役「生きることは学ぶこと、学ぶことは生きること」の相関関係を、古今東西の史実ならびに現在活躍中の諸先輩や、いわゆる「シニア学生」たちの生き様を分析し、検証することにある。
- (2) 本研究の第2の目的は、上記(1)の仮説が立証されれば、
  - i) まず、将来の要介護・要高額医療費受給者予備群を減少するため、現在の中高年、場合によっては若年層をも対象にしたグローバルな施策を提案することにある。具体的には高等教育機関における「中高年受け入れモデル」を開発するための基礎資料を得ることにある。
  - ii) 次に、既に社会が抱えている要介護・要高額医療費受給者のうち、物理的に自立不可能な障害者を除いて、「知的活動等のリハビリ」によって自律性を回復し、出来れば社会復帰をも可能とする仕組みを提案することにある。

## 3. 調査・分析の方法（第2報）

- (1) 調査対象：
  - i) 本学で学ぶシニア学生
  - ii) 本学で開催された公開講座やシンポジウム等に参加されたシニア
  - iii) 他大学で学ばれているシニア学生
- (2) 調査要領（その一）：
  - i) 本学で学ぶシニア学生に対する「アンケート調査」ならびに面接調査
  - ii) 公開講座やシンポジウム等に参加されたシニアに対する「アンケート調査」
  - iii) 他大学のシニア学生：「アンケート調査」ならびに面接調査（一部）
- (3) 調査要領（その二）：
  - i) ネット検索（主として厚生労働省データベース）による高齢社会の実態調査

（4）分析方法：

- i) 上記（2），（3）の調査結果より「知的活動と生涯健康現役」との相関分析
- ii) 「生涯健康現役」の仕組み（仮説）が、要介護・要高額医療費受給者への適用の可能性，特に社会復帰への施策になり得るかどうかの検証を行う。

4. 調査結果

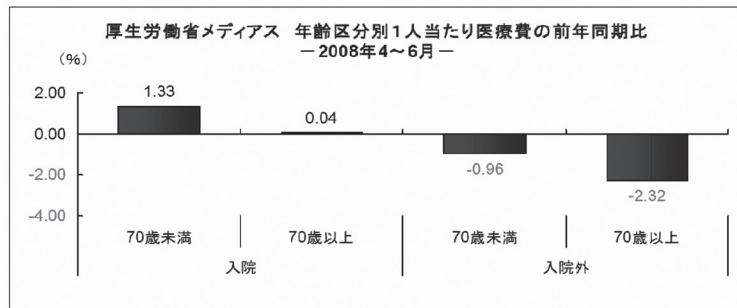
4-1. 高齢化社会イコール介護・医療費の増大？

1) 医療費の推移

「高齢化社会イコール介護・医療費の増大」というフレーズが，一般には常識として受入れられ，2006年度の医療制度改革に際しては，1人当たりの医療費の伸びが，一般が1.2%，高齢者は3.2%として医療費が推計された。しかし，現在，高齢者の医療費は，全く伸びていない，むしろ減少傾向にある。（2008年11月12日，日本医師会，定例記者会見資料：図2）。<sup>5)</sup>

図2. 厚生労働省メディアス年齢区分別一人当たり医療費の前年同期比

1人当たり医療費については，入院は70歳未満で+1.33%伸びたが，70歳以上では+0.04%と微増であった。入院外は，70歳未満，70歳以上ともマイナスであり，70歳以上では▲2.32%の落ち込みであった。



ちなみに，「厚生労働省統計表データベース」により，高齢者の医療費の推移を分析したのが，表1.，表2，図3.，図4. である。

表1. 医療費の推移

医療費の推移「厚生労働省：医療費の動向（19年度版）より」（単位：兆円）

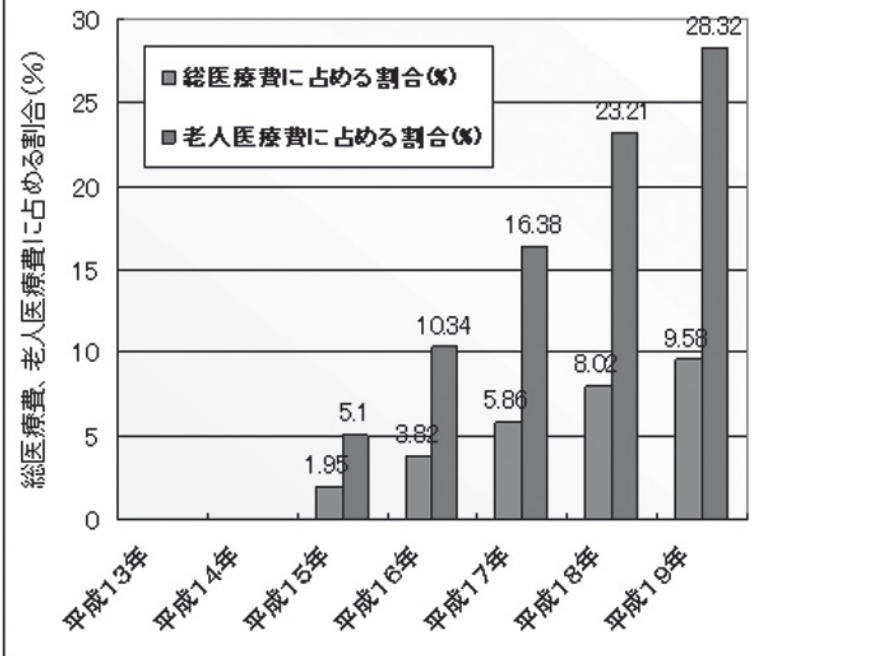
年度	総計(A)	70歳未満			高齢者(70歳以上)		
		小計	被用者保険	国民健康保険	小計(B)	65歳以上(C)	老人保健(D)
平成13年	30.4	17.5	9.7	7.8	11.7	-	11.7
平成14年	30.2	17.2	9.4	7.7	11.7	-	11.7
平成15年	30.8	17.2	9.2	8.0	12.3	0.6	11.7
平成16年	31.4	17.3	9.3	8.0	12.8	1.2	11.6
平成17年	32.4	17.5	9.4	8.1	13.5	1.9	11.6
平成18年	32.4	17.2	9.4	7.9	13.8	2.6	11.2
平成19年	33.4	17.4	9.5	7.9	14.5	3.2	11.3

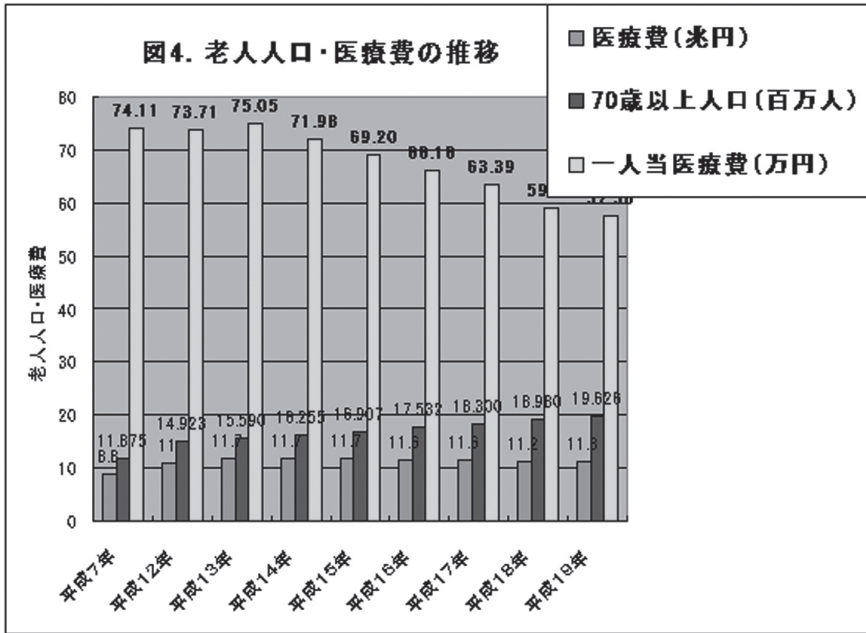
表2. 老人医療費の推移

**老人医療費の推移**

年度	医療費(兆円)	70歳以上人口(百万人)	一人当医療費(万円)
平成7年	8.8	11.875	74.11
平成12年	11.0	14.923	73.71
平成13年	11.7	15.590	75.05
平成14年	11.7	16.255	71.98
平成15年	11.7	16.907	69.20
平成16年	11.6	17.532	66.16
平成17年	11.6	18.300	63.39
平成18年	11.2	18.980	59.01
平成19年	11.3	19.626	57.58

図3. 65歳以上70歳未満の障害者医療費の推移





これらのデータから明らかなように、70歳以上の老人医療費は過去8年間、殆ど1兆円と横ばいで推移している。従って老人人口が増えるにつれて、一人当たりの医療費は、74.1万円から57.6万円と77.7%に減っているのである（図4）。それにもかかわらず、なぜ「老人医療費が増大する」と主張するのか。

実は、この4月から実施された「後期高齢者医療制度」によって、図らずもそのカラクリが見えてきた。すなわち、後期高齢者医療制度では、生活年齢75歳以上と線引きをしておきながら、実は「65歳以上74歳までの障害者の医療費」を後期高齢者医療費に埋没させ、高齢者の医療費が増大すると公表しているためである。（このデータは統計データとしては提供されてはいるが、加工し直さなければ簡単には見えてこない）

因みに、この「65歳以上74歳までの障害者の医療費」は、平成19年で全医療費の約10%、「埋没させている老人医療費全体の28%強」を占めている。（図3）

## 2) 介護費の推移（介護保険からみた「寝たきり老人」の推移）

「厚生労働省統計表データベース」により、高齢者の医療費の推移を分析したのが、表3. である。

表3. 「要介護5」認定者の推移（その他の区分については第1報参照）

要介護5(介護なしには日常生活を営むことがほぼ不可能な状態)認定者数の推移 12月現在					
区分	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
第1号被保険者	429,701	448,639	449,519	464,310	481,735
65歳以上75歳未満	70,089	68,984	67,220	66,438	65,498
75歳以上	359,662	379,655	382,299	397,872	416,237
第2号被保険者(40歳以上65歳未満)	19,872	19,893	19,909	20,211	20,229
合計	449,573	468,532	469,428	484,521	501,964
被保険者数の推移(人)					
区分	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
第1号被保険者	24,285,433	24,879,174	25,610,605	26,475,721	27,270,851
65歳以上75歳未満	13,729,708	13,818,958	14,060,537	14,425,357	14,665,991
75歳以上	10,555,725	11,060,216	11,550,068	12,050,364	12,604,860
第2号被保険者(40歳以上65歳未満)	43,315,000	43,355,000	43,562,000	43,063,000	42,879,000
被保険者に占める要介護5者の割合の推移(%)					
区分	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年
第1号被保険者	1.77%	1.80%	1.76%	1.75%	1.77%
65歳以上75歳未満	0.51%	0.50%	0.48%	0.46%	0.45%
75歳以上	3.41%	3.43%	3.31%	3.30%	3.30%
第2号被保険者(40歳以上65歳未満)	0.046%	0.046%	0.046%	0.047%	0.047%

表3によれば要介護5（介護なしには日常生活を営むことがほぼ不可能な状態）者は

① 75歳以上でも、過去5年間、殆ど100人に3人程度で推移し、増加していない。

次項の「高齢者の健康に関する意識調査」をみても「健康状態がよくない」と自意識する高齢者は6%に過ぎない。

② 65歳以上75歳未満では過去5年間、殆ど0.5%未満で推移（詳細なデータが無いので推量に過ぎないが、この1000人に5人の人達が、医療費全体の約10%、後期高齢者医療費の28%強を使っていることになるのか。）

③ 高齢者に限らず、40歳以上65歳未満（現役世代）でも10000人に5人程度が「寝たきり状態」で、この医療費については、公表されたデータがないので不明。

（注）「寝たきり状態」の中には、介護施設での「寝かされ状態」も含まれることが仄聞されるが、データを額面どおり受け止めても、高齢者の97%は健康者か、あるいは要介護者としても、精神的・肉体的リハビリによって自律の可能性はある。

### 3) 高齢者の健康に関する意識調査（平成15年5月：内閣府政策統括官より）

#### Q1. 現在の健康状態（総数%）

良い	まあ良い	普通	あまり良くない	よくない
24.80	22.60	25.80	26.60	6.10

#### Q2. 日常生活への影響

	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80歳以上
ある	12	18.5	26.6	34.4
ない	87.8	81.5	73.4	65.4
不明	0.2			0.2



Q3. 日常活動の状況

	とても難しい	少し難しい	全然難しくない
少し重いものを持ち運ぶ	13.2	21.7	65.1
階段を1階上までのぼる	9.2	17.7	73.1
数百メートルくらい歩く	6.8	13.1	80.1
自分で風呂に入り着替える	3.2	5.4	91.3

人間だれしも、出来ることなら人様のお世話にならず、自宅の畳の上で「自然死」したい。特に今の後期高齢者は「武士道の思想をたぶんに受け継ぎ、生き恥をさらさない」という明治の親の教育を受け、さらに、戦中戦後の飢餓にも耐え、自立的に生きることを体得してきた世代である。世間一般でも、健康に一番留意し、早朝の散歩を欠かさず自己管理しているのは高齢者たちである。（90%以上は健康老人である）

それにも係らず、現在の「医療・介護」行政は、「高齢者イコール高額医療費・要介護者」と決めつけ、悪徳介護業者あるいは終末医療「1日500万円、3日で1000万円」という悪徳医療業者を生み出し、これらに対する抜本的施策のないまま、今回「後期高齢者医療制度」を見切り発車したことによる軋轢（生涯健康現役のものまで、生活年齢のみで扱う矛盾）が露呈している。

4-2. 本学で学ぶシニアの現状

1) シニア学生の在籍数

平成20年9月末現在在籍のシニア学生は15名である。（内、社会人コースで入学し、平成19年からシニア学生としての奨学金が給付された2人を含む）

履修コース別・年齢・性別の在籍者数を、表4. および図5に示す。

表4. シニア学生在籍数（履修コース・年齢・性別）

年齢	60～64歳		65～74歳		75歳以上		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
4年コース	2		1				3	0
6年コース	3	1	1				4	1
2年コース（編入）							0	0
3年コース（編入）	2		2	1	1	1	5	2
合計	7	1	4	1	1	1	12	3

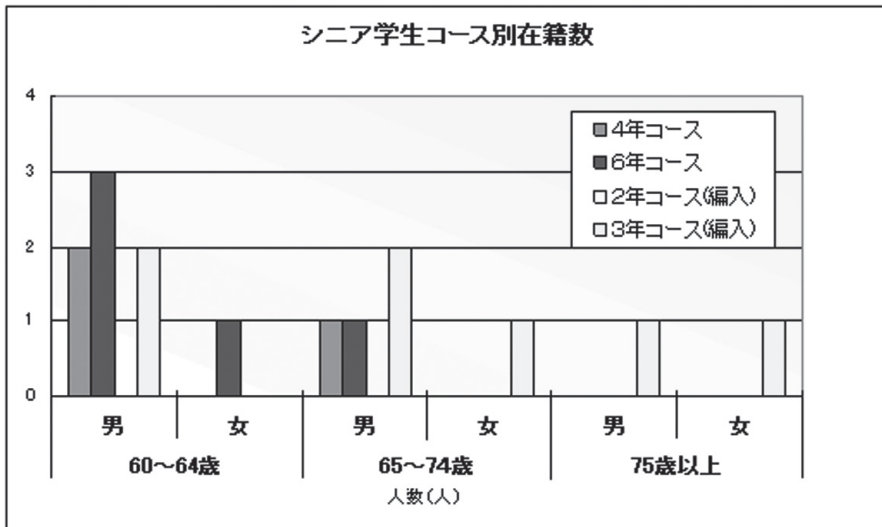


図5. シニア学生在籍数（履修コース・年齢・性別）

シニア特別選考の年齢条件が、原則として60歳以上となっているため、60歳未満の学生は在籍していない。

## 2) シニア学生の卒業後の進路（計画）・・・高齢者の学習意欲は「老いて益々盛ん」

現時点における卒業後の進路計画は次のとおりである。

### (1) さらなる大学進学をめざすもの

15人の在籍者のうち、いわゆる前期高齢者（5人）・後期高齢者（2人）が46.7%と約半数を占め、うち6人は、本学が大学3回目の履修である。具体的には、2009年3月に卒業予定の編入学の男性（編入学3年コース）はNPOで活躍中だが、環境問題についてさらに学ぶため、別の大学を目指している。また、編入学の女性（編入学3年コース75歳）も既に本学が3回目の大学であるが、1～2年休んで、4回目の大学を目指すそうである。さらに、「社会人入学」で今年9月に卒業した（男性76歳）は来春、4回目となる外国語大学を目指し卒業後も毎日、本学の図書館などで受験勉強をして合格した。

### (2) 本学内での進路変更

入学当初、4年コースを選択したシニアが、大学院に進み、より専門的に学び資格を取得したい。そのため基礎をもっとじっくり学びたいということで、6年コースに変更した。また、あるシニアは、あらゆる機会を捉えて、若者と一緒の海外研修コースに参加し、現在は、本学の海外協定校へ留学中である。

### (3) シニア学生の多くは卒業後、社会での活動を考えている。

シニアの多くは、卒業後もボランティア活動を考えており、中には大学での学びを「福祉の仕事に生かしたい」と、起業を考えているシニアもいる。

本学で学ぶシニア学生の約20%は、大学卒業後もさらに他大学への進学を目指すなど、「学習意欲

の止まるところを知らず！老いて益々盛ん」パワフルであるといえる。

3) 公開講座等を受講するシニアの現状

シニア特別選考の応募を勧誘しても殆ど集まらない地域のシニアたちに、「公開講座パソコン教室（無料）ただし、応募資格は60歳以上」と限定募集したにもかかわらず、新聞チラシ折込の即日、募集定員の3倍強(30人に対し100人)の応募者が殺到した。受講後の感想・要望でも、「パソコン教室を2、3日連続で開いてほしい」あるいは「十数回定期的に開いて欲しい」等、シニアのパソコンに対する学習意欲は、本学のシニア学生と同じである。ちなみに、どのようなシニアが集まったかを 図6 に示す。

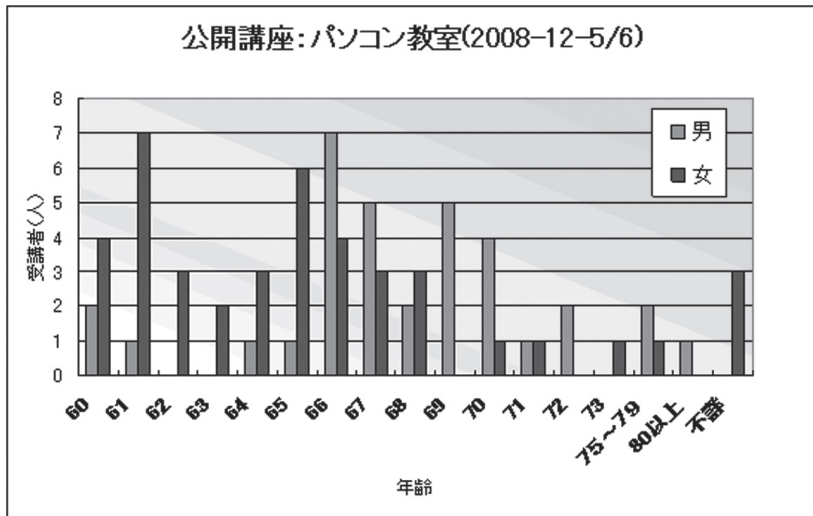


図6. 公開講座「パソコン教室」の受講者（年齢・性別）

65歳以下		65歳超		人数
男	女	男	女	
5	25	29	14	
0.17	0.83	0.67	0.33	男女比

今回は、急遽2クラス（金・土）を設けたが、65歳以下では、男性が17%にとどまり、女性が83%と圧倒的に多かった。（男性はまだ有職者がいるためと思われる。）

一方、65歳を超えると、女性が33%、男性が67%と男女の構成が逆転する。ちなみに、本学のシニア女子学生によれば、女性が一番学びやすい年齢は「50～60歳」であるという。その理由は、子供も独立し、夫がまだ現役で経済的に心配もなく、夫が昼間は不在で家事に追われることもなく、高等教育機関で体系的・継続的に学び卒業するには絶好のチャンスだという。しかし、65歳を超えると夫が在宅で家事等があり、女性が一人で家を出る機会が少なくなるという。確かに、この公開講座でもその傾向がみられた。

(注) 公開講座の内容にもよるが、別な見方をすれば、無料だから集まるのか、有料でも集まるのかに

については、次節「他大学で学ぶシニアの現状」で触れる。

#### 4-3. 他大学で学ぶシニアの現状

国内には、国立 87 大学・公立 76 大学・私立 571 大学の合計 734 大学がある（18 年度文科省調べ）。これらの大学ならびに私大協 18 年度「シニア世代の受け入れ推進に関する研究協議会」名簿の 126 大学について、「シニアの大学」、「シニア受け入れ」「シニア選考」などのキーワードでインターネット検索したところ、『シニア入学選考』をしている大学が 11 大学（本学を除く）存在した。この 11 大学について、アンケート調査を実施した。

その結果、実際に「シニア学生が在籍」している大学は 7 大学、これら大学の「シニア学生」在籍の総数は 74 名（平成 20 年 5 月調べ）に過ぎなかった。

因みに、60～84 歳の男女人口は 3,321 万人（統計局：平成 20 年 6 月 1 日確定値）、このうち、大学進学要件としての高校卒業者を 30%（昭和 30 年の 51.5% という公表データ以外に以前のデータがないが、現在のシニアたちの平均高校進学率を 30% と仮定して）とすれば、約 1000 万人が有資格者ということになる。したがって、このシニアのうち、0.0007% しか高等教育機関に在学していないことになる。

この要因として、教育内容はもちろんのこと、経済的負担が考えられるので、実施している各大学とも、入学金や授業料の減免など、何らかの学費負担の軽減を図っているが、シニアとして 60 歳以上と年齢制限があるため、前述のように、意欲ある女性が進学し難いということが考えられる。

ちなみに、2008 年 4 月に第 1 期生が入学した神戸山手大学では「50+50（50 歳以上、50 万円奨学金支給）」で募集したところ 13 名の入学者があった。この学生たちの性別年齢構成はつぎの通りである。

	50歳	52歳	53歳	57歳	60歳	61歳	63歳	66歳	不明	合計
男			1	1	1	2			1	6
女	1	1		1	1		1	1	1	7
合計	1	1	1	2	2	2	1	1	2	13

女性入学者の 57%、男性入学者の 50% が 60 歳以下である。年齢制限を引き下げることによって進学者の増加を招いたことが伺える。それでは 50 万円の奨学金の経済的効果はどうか？

上の年齢層では、まだ、年金受給者は一人のみで、年金に対する配慮は必要ないが、今後、団塊の世代の受入を考えると、年金は避けて通れない問題である。因みに、現時点における平均年金受給額は、

< 国民年金・厚生年金の老齢年金受給者の平均年金月額（単位円） >

	平成元年	6年	11年	16年
厚生年金	138,186	169,172	177,046	167,529
国民年金	31,125	43,074	50,118	52,565

平成元年から 16 年の国民年金・厚生年金の年金受給者の平均年金月額。（出典：社会保険庁）

厚生年金受給者でも、平均以上の受給者でないと、現状の学費負担では無理であろう。ましてや、国民年金のみの受給者にとっては、高等教育機関で学びたくても学べないのが現状である。したがって（短絡的見方ではあるが）、公開講座等の無料コースに殺到し、あまつさえ、地域に開かれた大学として「複数回、あるいは連続2、3日」の開講を望んでいるのではないだろうか。（制限紙数の関係で、まとめにはいる）

## 5. まとめ（考察と提言）

### 1) 大学で学ぶシニアの平均的群像

- (1) 現在のシニア世代の90%以上が健康であること。
- (2) 中等・高等教育を終えて社会生活に入り、「エコノミックアニマル」と揶揄されつつも、日本の高度成長の牽引車として、ただ仕事一筋にまい進し「アカデミックな知的刺激」から数十年遠ざかってきたこと。
- (3) 貫禄という社会的しがらみ(裱)から解放され、若者と一緒に「体系的・継続的にアカデミックな刺激」を受けてみると、気も心も青春が甦り、自分を取り戻した至福感を享受していること。
- (4) この継続的・体系的学習が精神の高揚（至福感の享受）となり、更なる昂揚を求めて再び他大学への進学を目指す原動力となっていること。
- (5) しかし、この蓄えられた「知恵・知識」を外へ向かって発散させる機会がなければ、この向学心も自分の内なる活動にとどまり、将来的には「なぜ」という内省の反動として「虚無感」に襲われ、頓挫することが予想される。
- (6) このセーフティ・ネットのひとつとして次の提言をする。

### 2) 老いて益々盛んなシニアを活用する「奨学金貸与制度」の構築

再構築されたシニアの知恵と経験を「国の宝」と位置づけ、国政として、向学心旺盛なシニアに対して、社会保障費からの学費助成を行う。この具体的な財源の一例として、高齢者医療費（平成19年度：約1兆円）の0.1%（百億円）を奨学金として1万人に貸与する。この奨学金の見返りとして、一定期間「小中高大の講師」等として着任し社会に還元させる。さらに、そのふりかえりとして「再び学び還元する」というサイクルが、生涯に亘って高齢者に定着するための仕組みを創設する。この仕組みによって、多くの高齢者が、安心して「高等教育機関」での自己研鑽（精神の高揚）と社会への還元による「いきがい（至福感）」を得ることによって「健康現役社会」を実現することが可能であろうと思量する。また、結果的には医療費・介護費の削減にも寄与することが推量されるが、具体的な削減量については、今後のシミュレーションに待ちたい。

なお、介護費についての公表データは、平成16年が最新であり、かつ全体把握が容易に出来ないようなデータになっているので、今回は、高齢者の医療費のみを俎上にのせた。

## 引用・参考文献

- 1) 独立行政法人労働政策研究・研修機構 主任研究員 長縄久生  
<http://www.jil.go.jp/column/bn/colum038.html>
- 2) 厚生省「平成9年版：厚生白書」
- 3) 「流動性知能を向上させるソフトウェア」2008-5-20  
[http://www.wired.com/science/discoveries/news/2008/04/smart\\_software](http://www.wired.com/science/discoveries/news/2008/04/smart_software)
- 4) 現代GPプロジェクト・シンポジウム「21世紀はシニアの時代～再び学び いきいき生きる～」  
2007.10.19 関西国際大学4号館101教室
- 5) 日本医師会，定例記者会見資料（2008年11月12日）
- 6) 厚生労働省「平成20年版：高齢社会白書」  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2007/gaiyou/19indexg.html>
- 7) 厚生労働省「厚生労働省統計一覧」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/index.html>